おちほ

第12号
1984年2月1日発行
社会福祉法人　椎の木会
落穂寮
発行者　増田正司

厚生大臣表彰を受賞して

落穂寮長　**増田正司**

去る10月28日、東京の日比谷公会堂で開かれた全国社会福祉大会で厚生大臣表彰の光栄に浴し、たいへん感激しております。永年にわたって社会福祉事業に功績があったという受賞でした。

これは、私個人の業績ではなく落穂寮の教育の実践が高く評価されたのでしょう。寮の子どもたちや職員の努力や精進の結果のたまものでまことにうれしいことです。全国の精神薄弱施設の中から選ばれ栄誉をうけたのはこのうえない喜びです。またま寮の主宰者であり代表して受賞者になったものと考え、身をひきしめ今後いっそう努力していかねばならないと思います。自分のからだで自分だけのものでない責任の重みが加わって新たな思いにかられます。人生の節目に差しかゝったこの区ぎりに、自分をふりかえり戒しめるのも意義深いことと思います。私が施設の仕事に就いて三十四年が過ぎました。指おり数えてみればずいぶん永い年月ですがいつの間にか時が流れていきました。

人なみ以上に丈夫なからだを親からさずかり、ありがたいことと亡くなったふた親に今頃合掌しております。お蔭で施設のきつい仕事にもへこたれずこれまで続いてこられました。施設の生活は常に耐乏と創意工夫（研究）と実践に体当りする連続です。経営が世間なみにまわりだしたのは四、五年前ぐらいからでしょうか。

私の親はサラリーマンで、兄弟は六人でしたから母親はいつも耐乏生活のやりくりに苦労していました。育ちざかりの兄弟は腹八分目の満足では腹がすいてたまりませんでした。その時期の貧しさからきびしい人間性がきたえられ、その体験が施設で生かされました。施設では同労の仲間と助け合い貧しさを分ちあい、励ましあいそこに又たのしさが加わり苦もまた楽しみに転化するのです。

私がこの仕事に入るきっかけは、江木武彦先生にすゝめられたからです。仕事のお師匠さんは糸賀一雄先生です。又池田太郎先生や田村一二先生からどれだけ人生や教育の哲理を教えられたかわかりません。近江学園で働いた六年間も私の人生を決定したと言えます。世の中には人が歩む道は無数にあります。その中から一筋の道をみつけ手探りで闇夜に灯りをともす福祉の貴い仕事に導いてくれた多くの師友にたゞたゞ感謝でいっぱいです。

しかし自己を主張するあまり先輩や同僚を傷つけ、他を傷つけることが自分をも傷つけ、身の置きどころに困り傷心に苦悩した日々が思い出されます。自分の狭量を棚にあげ他をあげつらう愚かな行為が職場の中に疑心をうえつけてしまい、たいせつなチームワーク（連帯性）をこわし生活の流れがゴツゴツと停滞しはじめ、およそ教育の集りとは無縁のものになってきたようすにびっくりして胆がつぶれる思いになったこともありました。

落穂寮で生活をともにした同僚や子どもたちからどれだけ知恵や勇気を与えられたかわかりません。思想と実践が深く練られもしました。生来がきちようめんなために、同じ仕事を処理するのに他の倍も三倍も時間がかゝってしまいます。しかしこれは私にとって物の本質をみる眼を養うことになり又常に始にかえり考えることをうえつけることになりました。

寮の子どもたちにとっても私にとっても、社会へのとりでである落穂寮が、この欠点だらけの気儘者をつつんで働く場所を与えてくれています。寮の生活はこれでよいとまだ安心できません。施設と社会が福祉の環に結ばれるよう更に研さんを続けていかなければならないと思います。

（58・11・30）

草木塔

本田憲生

中国清朝末期の学者、兪曲園の作品の中に『顔面問答』と云う、話があって、口鼻眼が眉毛に対して不平、不満、不服と、何故自分達は眉毛の下に位置しなければならないのか、と存在価値論争をするわけである。口鼻眼と各々独立して、立派にその役割を果しているにも関わらず、眉毛だけは〝君の役目は何だ〟と問われて〝自分自身何が役目であるのか答えられない。〟ただ、君達のご苦労に感謝しつつ、先祖より受け継いだまま、日夜すまぬすまぬと思いながら、懸命にこの場所を守っている。君達は他に誇れる役割を持っていて、羨しく思っている。とこんな具合である。〟ところが作者は〝自分はこれまで、口鼻眼の心懸けで暮してきた、がそれは間違っていた。今後は是非、眉毛の心懸けで世を渡りたい〟と結んでいる。了事の凡夫とでも云うことか。

何んとなく過した時期にあってもある種の経験だけは極めて、明瞭に甦ることがある。その一つに森鴎外の短篇『寒山拾得』の小説がある。かれこれ、三十年近く前に読んだものであるが、今でも、その折りの気持を覚えている。

この物語は、唐の貞観の頃にいたという台州刺吏、閭丘胤が天台国清寺に題名の寒山・拾得を訪ねるもので、自分に理解できないもの、会得出来ないものへの尊敬、それは盲目の尊敬であって、役にたたない。〝彌陀不レ識、禮レ我何為〟ということだそうだ。考え方を別にして見れば、現在の府県知事級の役人の閭丘胤と風狂の禅詩人との価値観の相違から生じる、人間的な滑稽さとも云える。

長安で主簿の任命を受け、これから任地へ赴く時になって、神経性ともみえる頭痛で困っている。そんな折り、通り掛りの豊干と云う僧に呪いで治してもらう。（鉄鉢の水をくんで、突然、閭丘の頭に吹き懸けた。びっくりした閭丘の頭痛の方もその瞬間に吹き飛んでしまっていた。）そこで閭丘は、今の度び自分も台州に往くが、会って為になる偉い人はいないか、と尋ねる。すると豊干は〝国清寺は拾得と云って、実は普賢、寺の西方にある寒厳の石窟に寒山と云って、文珠がいる〟と云って、去っていく。

閭丘は翌日、陽が西に傾く頃に国清寺に着く。煙と湯気の向うにだんばら頭に襤褸をまとい、焚火に当っている二人に会う。（拾得は衆僧の食器洗いを務め、寒山はその時に出る残飯を喰って生活している。）「寒山文珠、遯ニ㕓国清一、拾得普賢、状如ニ貧子一又似ニ風狂一或去或来。」閭丘は恭しく礼をして、朝儀太夫、使持節、台州主簿、上柱国、賜緋魚袋、閭丘胤と申す。と名告る。これを聞いて二人は「自相ニ把手一、呵呵大笑叫嘵乃云、豊干饒舌饒舌、彌陀不レ識禮レ我何為」と厨を駆け出して逃げて行くのである。

豊干も拾得も寒山も共に、天台大師智顗の後輩達で六七世紀にかけて、生きた風狂禅の僧で、中でも寒山は風狂の禅詩人として「咄哉咄哉三界輪回」と叫びつつ、自己を洞察し続けた人物と云われる。

こうした彼等の姿を追う時、本当に人間が生きるその行為にはどんな価値があるのだろうか、と思うのである。

その人物を扱ったものであったが、今一つ、鎌倉時代の思想家の中から、道元の思想形成の一端に目をやると、そこには宇治興聖宝林禅寺での第一講であると云われる、「山僧叢林を歴ること多からず。只これ等閑に天童先師に見えて、当下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞せられず。便ち空手にして郷に還る。所以に一毫も仏法なく、任運しばらく時を延ぶ。朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む。雲収って山骨露はれ、雨過ぎて四山低し、畢竟して如何。」の有名な語録である。

この道元をして、そう云わしめた経緯が興味深く思われる。

十五才で叡山を下って、十八才にして、栄西の法嗣、明全に師事。この師を促して（一二二三）二十三才で渡宋したのである。そして中国で最初に会った人物が『典座教訓』で知られる阿育王山の老典座である。（典座とは禅林六知事の一つで衆僧の斉粥、食事を司る職のこと。

彼は六十一才で、やっと昨年の夏安居明けに、この職について、明日一山大衆の御馳走をしたいと思って、日本の舟まで椎茸を買いに来たと云う。そして二人の会話

が始まった。

「阿育王山はどれ位の道程か。」

「三十四五里。〈日本の五六里〉。」

「いつお帰りか。」

「椎茸を買えば急ぎ帰る。」

「今日お会出来たのは誠に奇縁、御馳走をしたく思うが。」

「そうはしておれない。明日の供養は私が司らねばならぬ。」

「あなた以外に、斉粥の解る者もあろう。典座一人いなくとも支障あるまい。」

「私はこの老の年になって、この職を得た。老の修業というもの、どうして、これを他に譲れよう。」

「※座尊年、なんぞ坐禅弁道し、古人の話頭を看せずして、煩しく典座に充てて只管に作務す。何んの好事かある。」

この質問に対して、典座は呵々大笑して、

「外国好人、いまだ弁道を了得せず。いまだ文字を知得せざるあり。」と答えている。当時の学僧はもっぱら学問をし、国に重きをなし、誉れを得て、国政に関与出来るようになることが南都北嶺の常識であってみれば道元の疑問も理解出来る。しかし、彼自身仏道のあり方に疑問を抱き、正伝の仏法を求めて渡宋に及んだのであったが、いささか考え方に隔りが伺えるようである。要するところ、仏道の修業が何んであるのか、経典の意味するものが何んであるか、ご存知ない。と云われて、今や彼は必死で問う。

「如何があらんかこれ文字、如何があらんかこれ弁道。」

この問について典座は直接答えず、

「もし問処を蹉過せずんば、豈その人にあらざらんや。」

詰まるところ、その質問を素通りしてはならぬ。それに取り組んでこそ、はじめてものになるのだ。という具合である。彼はそれ以来自問自答し、天童山景徳、阿育王山広林禅寺等に参学すること五年、ことを成就して、天童山如浄によって印可を受けることとなった。

彼の修業中、典座は天童を訪れ例の問答をしたと云われ、それは

「如何があらんかこれ文字。」

「一二三四五。」

「如何があらんかこれ弁道。」

「偏界に会って蔵さず。」と。

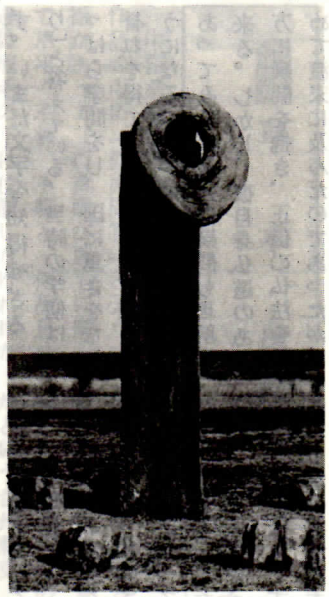
この典座によって、仏道の何んたるかを教えられた点を『典座教訓』の中で〝山僧、いささか文字を知り、弁道に了ずることはすなわち、かの典座の大恩なり〟と。

なれば参学によって、何を所得したかであるが、これこそ〝当下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞せられず。〟であった。これを当たりまえのこと、普通のこととでも云うのであろうか。誰しも眼は顔の横一線に対し、鼻は顔の真中に立って直っている。換言すれば大自然と云うか、宇宙全体というか、全ては〝在るがまゝが在る〟と云うことであろう。この〝在るがままが在る〟姿、存在がそのまま、万物流輪の真理の真ただ中に生きる人間の在り方というか、在る姿と理解するのである。この中で新しい生命は誕生し、老いて生命の火は消えて往く。

成長も発達も、片時として、火の消えゆく方向を避けては進まないのである。これが〝生きる行為の日常茶飯時〟のことと云うことではなかろうか。馬祖以後の思想家は〝著衣喫飯屙屎送尿〟とか〝平常心これ道〟と伝えている。

それは健常者であれ、障害者であれ、そこに別の価値があるのではなく、人間全てが道元の云う如く「眼横鼻直」に平常の在り方として生きている点に気づくのである。更に、健常、障害の状態をして、生命の真実なる営みと観る時、この〝真実なる営み〟も日常茶飯の営みとなるのである。個人にとって「生老病死」が一体であるように、人間にとって〝健常障害〟も又一体と云わねばならない。

この点に於いて、現実社会にあって、障害者や親達は健常者にとっての道標であり、大いなる師と云ってよい。＝万物一体の仁＝として。



碑の詞

箕口百合子

箕口は、一九七七年　八月、東京、足立区、北千住、車の排気ガスに包まれた下町の病院で胃ガンのため五十四才の生涯を閉じました。

たまたま形をもって、自らの想いを創る事を職業としておりましたので、一般の方には、粗大ゴミにしか見えぬ作品等が、私の手にかかえきれぬほど残ったのです。

一九七七年十二月初旬、縁あってこの石部に移ってきました。そしてたまたま、今私が働いています落穂寮の炊事が欠員になるのでと声をかけていただき、勤めさせていただく事になりました。

それから早くも七年目に入ろうとしております。

箕口　博　遺作展

東京　ときわ画廊　一九八〇年　五月

長野県飯山市　木島公民館　一九八一年　八月

京都　ギャラリー成安　ギャラリーじゅらく　一九八一年　十二月

滋賀県八日市市　文化芸術会館　一九八三年　十月

現代の美術界では、ほとんど無名に近い存在ですが、その中にあって、箕口の作品に、感銘してくださった、ひとにぎりの友人達のそれぞれの立場からのご尽力で四回も遺作展が出来ました。

それはなにか、箕口の言葉ではありませんが、

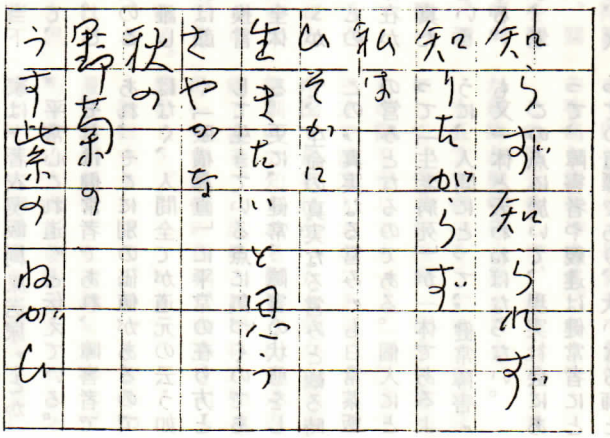
「他をして、私に制らしめたものであって、私がしたことではなく、大きな力のなすがままに」出来た様な気がします。

箕口には三十才の頃より、独学で彫刻の道をこころざし、自然現象が、侵害するままに崩れていく虚しさ、美しさ、又人間共が、生きていく為に、犠牲になった、すべての動植物等の記念碑を創る事を使命として、自からも厳しく、生涯をとじました。

この大きな作品等は、私にとっては「大きな、だゝっ子」の様なもので、私一人の力では、なにをするにもまゝならず、早く一人歩きをして、巣立ってほしいと、願っておりまします。

スペースシャトルがとんで、人工的にオーロラが出来るそうだ。何んでも人間が出来ないものがない様な時代になっていますのに、人間はますます管理される、淋しい時代に進んでいます。そういう世の中にあって、自然と本当に、素直に調和しあい暖くそれでいて鋭い作品等を、常時展示し、少しでも多くの方々に、箕口の想いを知っていただく記念館のようなものが出来ればと夢の様な事を念じ、又遺作展をするたびにその思いを深くしている次第です。

最後で、まことに失礼ですが、展覧会をするたびに、寮長はじめ、同僚の方々の暖かいはげましを、いただき、又いろいろご迷惑をおかけしたおわびとあわせ、今後共又よろしくお願い申し上げておわりにいたします。



箕口　博

（一九七一年）